

第19回

正論大賞発表

前東京外国語大学学長

中嶋嶺雄氏

第4回 正論新風賞発表

お茶の水女子大学教授

藤原正彦氏



正論大賞の中嶋嶺雄氏

フジサンケイグループはこのほど、第十九回「正論大賞」を国際社会学者で東京外国語大学前学長の中嶋嶺雄氏(67)に、また第四回「正論新風賞」をお茶の水女子大学教授、藤原正彦氏(60)に、それぞれ贈ることを決めました。中嶋氏は昭和十一年、長野県出身。東京外国語大学中国語科卒業後、東京大学大学院国際関係論課程修了。社会学博士。オーストラリア国立大学・パリ政治学院・カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院客員教授などを歴任。平成七年から十三年まで東京外国語大学学長。現在は、北九州市立大学大学院教授、アジア太平洋大学交流機構(UMAP)国際事務総長などを務める。十六年に秋田県に創設される国際教養大学の学長に就任する。



正論新風賞の藤原正彦氏

著書は、評論集「北京烈烈」でサントリー学芸賞受賞。「現代中国論」「中ソ対立と現代」「中国の悲劇」「香港回帰」など多数。

中嶋氏は、現代中国研究の第一人者である。中国の文化大革命を他に先駆けて毛沢東による「権力闘争の大衆運動化」と鋭く分析。また台湾が総統・副総統の直接選挙を実施し、民主化したことを、「台湾人のアイデンティティがそのまま国家に結びつくようなシステムをつくった」とし、国際社会に及ぼした影響を評価する。

長年にわたる中国研究だけではなく、米国、ロシアなど幅広い視野から国際関係についての研究・評論が「正論大賞」にふさわしいとされた。

一方、藤原氏は昭和十八年、旧満州(現中国東北部)生ま

れ。東京大学理学部数学科卒業後、同大学院理学系数学修士課程修了。米ミシガン大学研究員、米コロラド大学助教授、お茶の水女子大学助教授、英ケンブリッジ大学で研究と教育に従事し、平成元年からお茶の水女子大学教授。理学博士。日本数学会、米国数学会、日本ペンクラブ、日本エッセイストクラブなどの会員でもある。

専門の「数論」に関する数々の研究論文のほか、「若き数学者のアメリカ」で日本エッセイストクラブ賞を受賞。「遥かなるケンブリッジ」「数学者の休憩時間」「古風堂々数学者」「祖国とは国語」など著書は多数。

数学者だが、最近では教育問題を中心に現在の日本のあり方を憂慮し、さまざまな提言を行っている。とりわけ「国語力を飛躍的に充実させることが混迷する日本を立て直す」と訴えるなど、言論界に新しい風を起こしたことが評価された。

なお、中嶋、藤原両氏は産経新聞「正論」欄の執筆メンバーである。



「正論大賞」の正賞はブロンズ彫刻「飛翔」(御正進氏制作)、副賞は賞金百万円。「正論新風賞」の正賞は同「ソナチネ」(小堤良一氏制作)、副賞は賞金五十万円。贈呈式は平成十六年二月二十日夕、東京・赤坂プリンスホテルで行う。

第19回 正論大賞

「受賞の言葉」

中嶋 嶺雄

産経新聞社から本年度「正論大賞」の選考結果について携帯電話にお知らせを受けたとき、私は北九州市が主催したアジアの発展に関する国際会議のパーティー会場にいた。私にとっては全く思いがけないことだったので、暫くしてから謹んでお受けしたい旨のお返事をしたのだが、このところ大学行政や大学の新設にかかわっていて、言論活動に十分時間を割けない私が、「正論大賞」という名誉ある賞を受けてよいものかと、一瞬戸惑わない訳ではなかった。

しかし、中国や日中関係の在り方についてのいかにも大勢順応型の言論の在り様に違和感を感じた折には、努めて発言してきたつもりでもあったので、「正論大賞」の受賞は、私にとつて大変に嬉しいことである。

だが同時に今回私が受賞したということは、取りも直さず、中国論や台湾論ひいては日米関係や安全保障問題での産経新聞社の「正論」路線の歴史的な正当性が実証されたことにはかならず、それは最近同社から刊行された『恐れずおも

ねらず——雑誌「正論」30年の軌跡——』も雄弁に物語っている。

このような言論活動の一角に参与できたことを光栄に思うとともに、自分が感じ考えたことを、今後もありのままに発言できればと、これまで私を支えて下さった読者の皆さんや編集者の方々に感謝しつつ、改めて精進してゆきたいと思う。

私の生い立ち

中嶋 嶺雄

私は昭和十一（一九三六）年五月十一日に信州の松本市に生まれた。市中を流れる女鳥羽（めとば）川を裏手にした城下町の中心・中町二丁目にあった薬局の一人息子で、亡父は俳人としても活躍しており、現在満九十五歳の母も商家に生まれ育っている。

松本幼稚園に三年間通ったあと、美ヶ原から流れる薄（すすき）川のほとりの源池国民学校（小学校）に入り、三年生のときが終戦のいわゆる「墨塗り世代」である。新憲法下を清水中学校に過ごし、生徒会のリーダーであった。松本深志高校では山岳部員として北アルプスに登ったり、フランス語を正課として習って大学もフランス語で受験した。

松本は教育に熱心な文化的な都市柄で、幼稚園から高校まで、立派な教師に出会った。また、終戦直後の小学校四年生から松本音楽院第一期生として鈴木鎮一先生にヴァイオリンを習ったり、水彩画を県展に出品して石井柏亭先生に褒めていただいたり、陸上競技（短距離）では県新記録をつくったりと恵まれた生い立ちであったが、高校一年生のときに生家が今日でいえば「倒産」、見てはならない社会の醜い裏面を見てしまった。

その延長線上に大学では学生運動（全学連主流派）に熱中したが、六〇年安保の「敗北」を経て、大学院時代には既成左翼を批判すべく清水幾太郎先生らと現代思想研究会を立ち上げた頃から、中ソ論争下の中国や「毛沢東思想」への幻想から解き放たれたといえよう。やがて中国の文化大革命やわが国の大学紛争は、私の視点を決定的にしてくれた。

第4回 正論新風賞

「受賞の言葉」

藤原 正彦

数学とは、実験も調査もない、独創だけをよりどころとする孤独な学問である。そんな世界に長年住む数学者は、常識

や世論に頓着しない。それらから超越することをむしろ誇りに思う。だからしばしば周囲から浮く。時には非常識ならぬ無常識と思われたりもするが、常識にとらわれないからこそ独創が生まれる、と反省しない。やっかいな人種である。私も子供の頃からそんな傾向が強く、教え切れないほど座を白けさせてきたに違いない。そのうえ、自分が正しいと思うことは日本中、いや世界中を敵にしても譲らない、という気概が強い。そのせいであろうか、物心のついた頃から現在に至るまで、日本中の人々、世界中の人々に追われる夢をよく見る。追いつめられ、絶体絶命となった所で、汗びっしり目で目がさめる。

私の独りよがりな論説は、時には一般読者を啞然とさせ、しばしば良識派や穏健派の鬱蹙（うんじく）を買ったに違いない。時折いたかくファンレターや励ましの手紙は、少数の変人からと思っていた。今回このような賞をいただくとは意外であったが、「新風賞」というからには独創を認められたのだ、と勝手に解釈して光栄に思っている。公に認められたということは、さほど独創的でなかったのかも知れない、選考委員が変人ばかりだった可能性もある、などと天邪鬼が脳裏をかすめるが、やはり認められたというのは文句なしにうれしい。